

**[B年] 降誕前第9主日(2022年10月23日)****【旧約聖書日課】 ヨブ記 38章1～18節**

- 1 主は嵐の中からヨブに答えて仰せになった。
- 2 これは何者か。知識もないのに、言葉を重ねて神の経綸を暗くするとは。
- 3 男らしく、腰に帯をせよ。  
わたしはお前に尋ねる、わたしに答えてみよ。
- 4 わたしが大地を据えたとき お前はどこにいたのか。  
知っていたというなら理解していることを言ってみよ。
- 5 誰がその広がりやを定めたかを知っているのか。  
誰がその上に測り縄を張ったのか。
- 6 基の柱はどこに沈められたのか。  
誰が隅の親石を置いたのか。
- 7 そのとき、夜明けの星はこぞって喜び歌い  
神の子らは皆、喜びの声をあげた。
- 8 海は二つの扉を押し開いてほとばしり  
母の胎から溢れ出た。
- 9 わたしは蜜雲をその着物とし  
濃霧をその産着としてまとわせた。
- 10 しかし、わたしはそれに限界を定め  
二つの扉にかんぬきを付け
- 11 「ここまでは来てよいが越えてはならない。  
高ぶる波をここでとどめよ」と命じた。
- 12 お前は一生に一度でも朝に命令し  
曙に役割を指示したことがあるか
- 13 大地の縁をつかんで  
神に逆らう者どもを地上から払い落とせと。
- 14 大地は粘土に型を押ししていくように姿を変え  
すべては装われて現れる。
- 15 しかし、悪者どもにはその光も拒まれ  
振り上げた腕は折られる。
- 16 お前は海の湧き出るところまで行き着き  
深淵の底を行き巡ったことがあるか。
- 17 死の門がお前に姿を見せ  
死の闇の門を見たことがあるか。
- 18 お前はまた、大地の広がりやを  
隅々まで調べたことがあるか。  
そのすべてを知っているなら言ってみよ。

**【使徒書日課】 使徒言行録 14章8～17節**

8 リストラに、足の不自由な男が座っていた。生まれつき足が悪く、まだ一度も歩いたことがなかった。9 この人が、パウロの話すのを聞いていた。パウロは彼を見つめ、いやされるのにふさわしい信仰があるのを認め、  
10 「自分の足でまっすぐに立ちなさい」と大声で言った。すると、その人は躍り上がって歩きだした。11 群衆はパウロの行ったことを見て声を張り上げ、リカオニアの方で、「神々が人間の姿をとって、わたしたちのところにお降りになった」と言った。12 そして、バルナバを「ゼウス」と呼び、またおもに話す者であることから、パウロを「ヘルメス」と呼んだ。13 町の外にあったゼウスの神殿の祭司が、家の門の所まで雄牛数頭と花輪を運んで来て、群衆と一緒に二人にいけにえを献げようと

した。14使徒たち、すなわちバルナバとパウロはこのことを聞くと、服を裂いて群衆の中へ飛び込んで行き、叫んで15言った。「皆さん、なぜ、こんなことをするのですか。わたしたちも、あなたがたと同じ人間にすぎません。あなたがたが、このような偶像を離れて、生ける神に立ち帰るように、わたしたちは福音を告げ知らせしているのです。この神こそ、天と地と海と、そしてその中にあるすべてのものを造られた方です。16神は過ぎ去った時代には、すべての国の人が思い思いの道を行くままにしておられました。17しかし、神は御自分のことを証ししないでおられたわけではありません。恵みをくださり、天からの雨を降らせて寒りの季節を与え、食物を施して、あなたがたの心を喜びで満たして下さっているのです。」

**【福音書日課】 ルカによる福音書 12章13～31節**

13 群衆の一人が言った。「先生、わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください。」14 イエスはその人に言われた。「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。」15 そして、一同に言われた。「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」16 それから、イエスはたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作だった。17 金持ちは、『どうしよう。作物をしまっておく場所がない』と思い巡らしたが、18 やがて言った。『どうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、19 こう自分に言ってやるのだ。『さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ』と。』20 しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』と言われた。21 自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」

22 それから、イエスは弟子たちに言われた。「だから、言っておく。命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。23 命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切だ。24 鳥のことを考えてみなさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。だが、神は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりもどれほど価値があることか。25 あなたがたのうちのだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。26 こんなごく小さな事さえできないのに、なぜ、ほかの事まで思ひ悩むのか。27 野原の花がどのように育つかを考えてみなさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。28 今日野にあって、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。信仰の薄い者たちよ。29 あなたがたも、何を食べようか、何を飲もうかと考えてはならない。また、思ひ悩むな。30 それはみな、世の異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存じである。31 ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる。」

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## ヨブ記 38章1～18節

- 1 主は嵐の中からヨブに答えられた。
- 2 知識もないまま言葉を重ね  
主の計画を暗くするこの者は誰か。
- 3 あなたは勇者らしく腰に帯を締めよ。  
あなたに尋ねる、私に答えてみよ。
- 4 私が地の基を据えたとき あなたはどこにいたのか。  
それを知っているなら、告げよ。
- 5 あなたは知っているのか  
誰がその広さを決め  
誰がその上に測り縄を張ったのかを。
- 6 地の基は何の上に沈められたのか。  
誰が隅の親石を据えたのか。
- 7 夜明けの星々がこぞって歌い  
神の子らが皆、喜び叫んだときに。
- 8 海がその体内からほとばしり出たとき  
誰が海の扉を閉じたのか。
- 9 私が雲をその上着とし  
密雲をその産着としたときに。
- 10 私は海のために境を定め  
かんぬきと扉を設けた。
- 11 私は言った。  
「ここまでは来てよいが、越えてはならない。  
あなたの高ぶる波はここで止められる」と。
- 12 あなたは生まれてこの方、朝に命じ  
曙にその場所を示したことがあるか。
- 13 地の果てをつかんで  
そこから悪しき者どもを振り落としたことがあるか。
- 14 地は刻印を押された粘土のように変わり  
上着のように彩られる。
- 15 悪しき者どもからその光は取り去られ  
振り上げた腕は折られる。
- 16 あなたは海の源まで行ったことがあるか。  
深い淵の奥底を歩いたことがあるか。
- 17 死の門があなたに姿を現したか。  
死の陰の門をあなたは見たことがあるか。
- 18 あなたは地の広がりを知ったのか。  
そのすべてを知っているなら、言ってみよ。

## 使徒言行録 14章8～17節

8 リストラに、足の不自由な男が座っていた。生まれつき足が悪く、まだ一度も歩いたことがなかった。9 この人が、パウロの話しに耳を傾けていた。パウロは彼を見つめ、癒されるのにふさわしい信仰があるのを認め、10 「自分の足でまっすぐに立ちなさい」と大声で言った。すると、その人は躍り上がって歩きだした。11 群衆はパウロの行ったことを見て声を張り上げ、リカオニアの方言で、「神々が人間の姿をとって、私たちのところに降りて来られた」と言った。12 そして、バルナバを「ゼウス」と呼び、また主に話す者であることから、パウロを「ヘルメス」と呼んだ。13 町の外にあったゼウスの神殿の祭司が、家の門の所まで雄牛数頭と花輪を運んで来て、

群衆と一緒に二人にいけにえを献げようとした。14 使徒たち、すなわちバルナバとパウロはこのことを聞くと、衣を引き裂いて、群衆の中に飛び込んで行き、叫んで、15 言った。「皆さん、なぜ、こんなことをするのですか。私たちも、あなたがたと同じ人間にすぎません。あなたがたが、このような偶像を離れて、生ける神に立ち帰るように、私たちは福音を告げ知らせしているのです。この神こそ、天と地と海と、そこにあるすべてのものを造られた方です。16 神は過ぎ去った時代には、すべての民族が思い思いの道を行くままにしておかれました。17 しかし、神はご自分のことを証ししないでおられたわけではありません。恵みをくださり、天から雨を降らせて実りの季節を与え、あなたがたの心を食物と喜びで満たしてくださっているのです。」

## ルカによる福音書 12章13～31節

13 群衆の一人が言った。「先生、私に遺産を分けてくれるように兄弟に言うてください。」14 イエスはその人に言われた。「誰が私を、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。」15 そして、群衆に向かって言われた。「あらゆる貪欲に気をつけ、用心しなさい。有り余るほどの物を持っていても、人の命は財産にはよらないからである。」16 そこで、イエスはたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作だった。17 金持ちは、『どうしよう。作物をしまっておく場所がない!』と思いつらして、18 やがて言った、『こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や蓄えを全部しまいでんで、19 自分の魂にこう言うてやるのだ。『魂よ、この先何年もたくわえができたぞ。さあ安心して、食べて飲んで楽しめ。』」20 しかし、神はその人に言われた。『愚かな者よ、今夜、お前の魂は取り上げられる。お前が用意したものは、一体誰のものになるのか。』21 自分のために富を積んでも、神のために豊かにならない者はこのとおりだ。」

22 イエスは弟子たちに言われた。「だから、言うておく。命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと、思い煩うな。23 命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切だ。24 鳥のことを考えてみなさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。だが、神は鳥を養ってくださる。まして、あなたがたは、鳥よりもどれほど優れた者であることか。25 あなたがたのうちの誰が、思い煩ったからといって、寿命を僅かでも延ばすことができようか。26 こんな小さなことさえできないのに、なぜ、ほかのことまで思い煩うのか。27 野の花がどのように育つのかを考えてみなさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。28 今日野にあって、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。信仰の薄い者たちよ。29 だから、何を食べようか、何を飲もうかとあくせくするな。また、思い悩むな。30 それはみな、世の異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存じである。31 ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは添えて与えられる。」

**黙想のためのノート****次主日教会暦と聖書日課について**

・10月23日「降誕前第9主日」の日課主題は「創造」。日本基督教団の「新しい教会暦」は、一年一巡りの始まりを、「降誕日」から9主日遡る「降誕前第9主日」としている。これは、伝統的な教会暦の一年一巡りの始まりとされてきた「待降節第1主日」の前に5主日の期間を設け、「待降節」に記念する「旧約の預言」の主題を拡大して取り上げるために為された試みである。教団の「新しい教会暦」は、ローマ・カトリック教会が第2ヴァチカン公会議で400年ぶりに大きく方針転換し諸教派教会との一致を目指し始める前、1950年代に英国で超教派の典礼一致運動として始められたジョイント・リタージカル・グループの提案する典礼暦に則った教会暦の試みであるが、現在採用している教派は日本基督教団のみである。

・「新しい教会暦」に基づく主日聖書日課は、この主日から、福音書日課を「ルカによる福音書」に基づいて編成する「C年」となる。

・旧約聖書日課は、「ヨブ記」から、ヨブが最終的に神の告げる言葉を直接聞く場面の中からの箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、バルナバとパウロらの宣教団がリストラの町で活動していた際の逸話を告げる箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、主イエスが「愚かな金持ちのたとえ」に続いて「ただ神の国を求めべきこと」を教えた箇所。

**旧約日課(ヨブ 38章より)**

・「ヨブ記」は、ユダヤ正典「諸書」の中で「箴言」および「詩編」と共に「エメット」の呼称で呼ばれる文書。「エメット」は、この三文書の呼称を頭文字を並べた呼称だが、ヘブライ語の「真実」を意味する単語にあたる。「諸書」は、ユダヤ正典中、「律法と預言者」よりも遅れて正典化された諸文書で、最終的に正典として確定したのは紀元1世紀末ごろとされるが、各文書の成立時期には大きな開きがある。「ヨブ記」の文書としての成立および正典編入の時期については、一致した見解が得られていないが、正典「預言者」中の「エゼキエル書」が「ヨブ」という義人の存在を知っており(エゼ14:14および14:20)、バビロン捕囚の時代(前6世紀)までには「義人ヨブの伝承」が知られていたと考えられる。「ヨブ記」は、散文形式による物語部分(1~3章および42章末尾)と詩文形式による問答部とに分けられ、それぞれ異なる形で伝承されてきた「ヨブ伝承」が統合されて「ヨブ記」となったのだろう。

・日課箇所は、「ヨブ記」の詩文形式による問答部分の第五の部「ヨブと神との問答」の冒頭にあたる。「ヨブ記」の問答部分は、はじめに三人の友人との問答、続いて四人目の人エリフとの問答が置かれ、これらの部分は、ヨブとの間で問答が重ねられる形式で進行する。しかし、第五の「神との問答」は、事実上、神が一方的に問いかけ、答えを示し、最終的にヨブがそれに同意することで閉じられる。

・「ヨブ記」は、「義人ヨブ」が不条理に蒙った苦難の意味を問い、答えを求める内容となっているが、本書自体は、最終的な神の告知にもかかわらず、ヨブの問いに答えるものとはなっていない。むしろ、不条理な苦難を蒙る現実にもかかわらず、なお、神の現臨を認め、その経綸(=世界統治、摂理)の中に自分の身を置いて生きることを良しとする信仰のあり方を示すのみである。日課箇所となっている神の告知の冒頭も、圧倒的な神の経綸の事実を目を向けることを勧めている。

**使徒書日課(使徒 14章より)**

・「使徒言行録」は、「ルカ福音書」の続巻として著された「初代教会正史物語」の書。「十二人の使徒」を中心とした約120人の集団から始まりエルサレムを拠点として活動した教会共同体が、新たにディアスポラ系ユダヤ人を仲間に加えながら地中海世界各地に教会共同体を建設、展開していく事情を、前半はエルサレムを拠点としたペテロを中心に、後半はシリア・アンティオキアを拠点としたパウロを中心に描く。

・日課箇所は、シリア・アンティオキアの教会共同体が指導者バルナバのもとに編成し派遣した宣教団の活動地の一つ、ローマのキリキア属州に位置する町リストラでの逸話を伝える箇所。パウロの生誕地タルソスもキリキア属州内に位置する。この地域は、アケメネス朝ペルシア帝国の支配の後、アレクサンドロス大王の支配を経てセレウコス朝シリアの支配、しばらくの混乱期を経て共和制ローマの属州に編入されており、いわゆるヘレニズム文化、グレコ・ロマン文化の影響を強く受けていた。日課箇所でも当地の人々を取り上げる「ゼウス」や「ヘルメス」は、ギリシア神話の神々であり、文化浸透の背景が見て取れる。「ゼウス」はギリシア神話の最高神、「ヘルメス」は「オリュンポス十二神(ホイ・ドーデカ・テオイ)」の一人でおもにゼウスに仕える「伝令神」と位置づけられている神。「十二人(ホイ・ドーデカ)」は、「使徒言行録」では「使徒たち」をはじめとしてある集団の中心メンバーを意味する人数として用いられており(6:2、7:8、19:7)、パウロが「ヘルメス」という「十二神」の一人に喩えられたという逸話は、その事柄自体は否定されているとしても、彼がバルナバを指導者とするアンティオキアの教会共同体の「十二人」にふさわしい人物であることを暗に示唆しようとしてもいるのだろう。実際、「使徒言行録」は、この逸話の中でバルナバとパウロを「使徒」と呼んでいるが(14:14)、これは、1章で示された「使徒」の定義に従っておらず、他の箇所では一切見られない例外的な適用である。

・11節「神々が人間の姿をとって、わたしたちのところにお降りになった」と言ったという人々の言説は、イエスに関する神学理解と重なり合う。しかし、この逸話中、パウロはこの言説が自分たちに適用されることを拒むが、「使徒言行録」もイエスのことを「神から遣わされた方」(2:22)と位置づけている。

福音書日課(ルカ 12 章より)

・日課箇所は、「愚かな金持ちのたとえ」から「思い悩まず神の国を求める教え」へと続く一連の教えで、同じ場面設定での教えが 12 章の終わりまで続く。日課箇所の「愚かな金持ちのたとえ」はルカ福音書だけが伝える教えであるが、「思い悩まず神の国を求める教え」はほぼ同じ内容で「マタイ福音書」が「山上の説教」の一部として伝えている。

・「ルカ文書(福音書+使徒言行録)」は、「富・財産」の問題に強い関心に向け、「富・財産」への執着や依存を一種の偶像礼拝と見て強く戒めるが、「富・財産」そのものを否定して清貧を説くわけではなく、むしろ「富・財産」の価値を相対化し、「神信仰」を土台とした「富・財産」の意味のある用い方に関心に向けさせようとしている。日課箇所の「愚かな金持ちのたとえ」も、この観点から理解することが求められる。すなわち、この「愚かな金持ちのたとえ」に「思い悩むな」の教えが接続された上で、その結論は、「マタイ」の「山上の説教」の場合と異なり、「自分の持ち物を売り払って施しなさい…あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ」(33~34 節)と示される。つまり、「ルカ福音書」は、ここでの「思い悩み」の原因をもっぱら「富・財産」に対する執着や依存の問題として取り上げ、教えを整理し、伝えているのである。

・「思い悩む(メリムナオー)」の原義は「心を用いる、心配る」で、他者に対すれば「配慮する」となる。

来週の誕生日 (10月23日~29日)

主日礼拝の讚美歌から

・21-223 番「造られたものは」(= I-75 番「ものみなこぞりて」)は、13 世紀イタリアの修道士アッシジのフランチェスコの宗教詩「太陽の讚歌」による讚美歌。曲は、17 世紀ドイツで出版された讚美歌集所収の原曲をヴォーン・ウィリアムスが修正し、広く英語圏でも広まったもの。

・21-171 番「かみさまのあいは」(= E40 番)は、カトリック司祭・佐久間彪が作詞した創作詩編歌(148 編)で、1980 年版『典礼聖歌』に所収後、1987 年版『こどもさんびか2』に採用された。ローマ・カトリック教会は 1960 年代に開催した第 2 ヴァチカン公会議の結果、それまでの世界共通ラテン語典礼という原則を大転換し、信徒が完全に母国語でミサにあずかるという原則で典礼改革が行われた。以来、数多くの日本語典礼聖歌が創作され、その中からプロテスタント讚美歌に導入されたものも少なくない。プロテスタントとの共同翻訳である『聖書・新共同訳』も、この典礼改革の一環で行われたもの。佐久間司祭は、日本でこの典礼改革を担った委員の一人。

・21-363 番「み神の力は」は、18 世紀前半の代表的な英語讚美歌作家 I.ウオッツが子どものための讚美歌集(1715 年)のために作詞したものに、V.ウィリアムズが紹介したイギリス民謡曲を組み合わせたもの。

21-223「造られたものは」

Laudato si', mi Signor

「太陽の賛歌」(アッシジの聖フランシスコ)

(訳: 石井健吾)

いと高い、全能の、善い主よ、  
 賛美と栄光と誉れど、すべての祝福は、あなたのものです。いと高いお方よ、このすべては、あなただけのものです。だれも、あなたの御名を呼ぶにふさわしくありません。

私の主よ、あなたは称えられますように  
 すべての、あなたの造られたものと共に太陽は昼であり、あなたは太陽で私たちを照らされます。太陽は美しく、偉大な光彩を放って輝き、いと高いお方よ、あなたの似姿を宿しています。

私の主よ、あなたは称えられますように  
 姉妹である月と星のためにあなたは、月と星を天に明るく、貴く、美しく創られました。

私の主よ、あなたは称えられますように  
 兄弟である風のために。まだ、空気が雲と晴天と、あらゆる天候のためにあなたは、これらによって、御自分の造られたものを扶け養われます。

私の主よ、あなたは称えられますように  
 姉妹である氷のために。氷は、有益で謙遜、貴く、純潔です。

私の主よ、あなたは称えられますように  
 兄弟である火のために。あなたは、火で夜を照らされます。火は美しく、快活で、だくましく、力があります。

私の主よ、あなたは称えられますように  
 私たちの姉妹である母なる大地のために。大地は、私たちを養い、治め、さまざまな実と色とりどりの草花を生み出します。

私の主よ、あなたは称えられますように  
 あなたへの愛のゆえに赦し、病いと苦難を堪え忍ぶ人々のために。平和な心で堪え忍ぶ人々は、幸いです。その人たちは、いと高いお方よ、あなたから栄冠を受けるからです。

私の主よ、あなたは称えられますように  
 私たちの姉妹である肉体の死のために。生きている者はだれも、死から逃れることができません。大罪のうちに死ぬ者は、不幸です。あなたの、いと聖なる御旨のうちにいる人々は、幸いです。第二の死が、その人々をそこなうことは、ないからです。

私の主をほめ、称えなさい。  
 主に感謝し、深くべりくだって、主に仕えなさい。

21-363「み神の力は」

I Sing the Almighty Power of God

1. We sing the mighty power of God / that made the mountains rise, / that spread the flowing seas abroad / and built the lofty skies. / We sing the wisdom that ordained / the sun to rule the day; / the moon shines full at his command, / and all the stars obey.
2. We sing the goodness of the Lord / that filled the earth with food; / he formed the creatures with his word / and then pronounced them good. / Lord, how your wonders are displayed, / where'er we turn our eyes, / if we survey the ground we tread / or gaze upon the skies.
3. There's not a plant or flower below / but makes your glories known, / and clouds arise and tempests blow / by order from your throne; / while all that borrows life from you / is ever in your care, / and everywhere that we can be, / you, God, are present there.